

⑩ 基底部拡大の作業の一環だ。

命令する芸術といっても、すぐどうということはないのは当然だ。所詮、そういう運動を起すこと自体に意味があるのであって、ニューヨーク、あるいは作品には多大な意味は含まれていない。要するに「絵画とはなにか」という問いに対して果敢に戦い「とは」の領域を広げてゆくこと。あるいは広げてゆく戦いの道具の鋭さが必要なのではなかろうか。そして所詮「絵画」とはが定義出来ても解剖した人間が人間ではないように、意味ないものかもしれないのだ。しかし、解剖すら出来ていないのが、いや必要なのだ。とくに輸入文化で育った日本の一員として、基底部に杭を打ち込む勇気は絶対に必要なのだ。この原則的の起点を探ることによってのみ、「日本的 輸入文化の誇り」が定着されるのであって、それを避けて通るならいくら立派な思想が生まれ、作品が出来たとしても、常に注文主のいる製品でしかないのだ。基底部からの製品であれば、偶然であれば、偶然である程、確かな思想の産物の性格を示し、現在作家の、タマタマ花開いたアダ花とはならぬだろう。そういう意味からの基底部開発のキャッチフレーズが、「命令する芸術」だといったら、いいすぎになるだろうか。なにはともあれ、結果的には、そうなることを愚かな計算ではあるが、懸命にはじいているのは確かなことだ。